〔研究ノート〕

素庵研究(2)

角倉素庵の墓―嵯峨あだしの念仏寺―

平成６年11月３日に、京都の角倉宗家16代当主、角倉平治さんが亡くなられた。88歳の生涯でした。

一昨年の春、ＮＨＫ大阪放送局の経済記者大塚融さんの案内で、下京区西堀川通七条下ルで和菓子を商いされていた角倉平治さんのお店をはじめて訪ねました。店の二階の居間で、幕末動乱期の嵯峨角倉家の顚末の次第をうかがいました。それは興味尽きない話でした。話の途中、平治さんは、からだが冷えたからといって温かい風呂に入られた。平治さんの干鮭のような痩せた身体と飄々とした話し方が強く印象にのこりました。昭和41年に「角倉同族会」を組織し、会報誌『すみのくら』を発行され、「角倉家一統」（角倉家譜）を執筆された平治さんの遺志は、きっと同族の方に永く受け継がれるでありましょう。

さて、角倉素庵は、江戸時代のはじめの寛永９年（1632）６月22日に逝きました。享年62歳。その墓は、京都嵯峨野、化野（あだしの）念仏寺にあります。本来なら素庵は、角倉家（吉田家）の菩提寺である嵯峨の二尊院に葬られるはずでしたが、彼の遺言により、西山の化野に独り葬られました。

この化野は、古来死骸を野ざらしにして風葬とした所で、寺伝によりますと、弘法大師がこの地に葬られた死者の菩提を弔うため、如来寺を建立したのがおこりとされ、さらに法然上人が念仏道場を開いたことにより、今の寺名になったといわれています。8月23日、24日に無縁仏の霊にローソクを供える「千灯供養」は、ことに有名であります。

念仏寺の本堂脇の井戸の左手、小高い裏山へ通じる竹林の薄暗い小径を登り、途中、左の脇径に入り、また登ると、青竹の林と柴垣に囲まれた10メートル四方の開かれた明かるい平地に出ます。素庵の墓は、その中央の奥に、ただ一つひっそりと建っています。その地は清浄で明かるく、竹林をとおる風の音だけが聞こえ、別世界に居るようです（写真）。

その墓は、石造りで簡素なかたちです。高さはおよそ２メートルぐらい。その墓碑銘は、正面には大文字で「貞子元之墓」、その下方に二行で「子元吉田素庵、之字也諱順」と刻まれています。また裏面には右側に小文字で「寛永九年壬申六月二十二日」と刻まれてあります。毎年、素庵顕彰会による供養会が行われているとききます。「素庵は仏を出て儒に入る」と若い友人那波活所が述べていますが、その墓碑名は儒学者にふさわしいものです。素庵その人のすべてがこの墓で表現されているのではないかと思いました（写真）。

彼の友人堀杏庵（正意）が書いた『儒学教授兼両河転運使吉田子元状』（寛永10年４月）によりますと、「同壬申三月、公病に臥す、門人（和田）宗充を召し、訓戒を作りて二子（玄紀と厳昭）に遺して曰く、我死すれば則ち西山の麓に葬り、貞子元之墓と書せと云う、地理の書、風水の術、兼学を以っての故なり」（漢文）、また「同二十二日病革まる。先聖（孔子）の影を枕上に掛け、香案を備え祭器を奠じ、扶起して危坐し、香を焼いて再拝し、二子弟長因を左右に喚び手を執って永訣す、春秋六十有二歳のみ」（漢文）とあります。この文章により、儒者の最後を知ることができますが、それよりも、風水地理説によって自らの墓を造らせたことにおどろきます。素庵の書跡を別とすると、彼の芸術的な遺品はほとんどありません。としますと、これは、彼の確かな表現物の一つといってよいでしょう。

さて、亡くなる５年前、寛永４年（1626）に、素庵は大堰川の邸宅も次男厳昭（平次）に譲り（すでに長男玄紀には二条の屋敷を譲った）、財産を挙げて宗族、親戚に分ち、身には数千巻の蔵書と寝具などを残すのみとなりました。というのは、素庵は、元和７年（1621）ごろ、当時不治の病といわれた癩（ハンセン氏病）にかかり、そして寛永４年にその病により失明したからであります。

素庵は、それまで住んでいた嵯峨の本邸を出て、清涼寺（釈迦堂）の西隣、つまり西門を出た北側の「中院」とよばれた土地に小さな庵を結びました。この地には、南北朝時代から千光寺という寺院がありましたが、父の了以が慶長18年（1613）に大堰川の開鑿で亡くなった人を供養するために、川向こうの嵐山の中腹に千光寺の建物を移しました。素庵は、弟子の宗充をともなって、その千光寺の旧地に隠棲し、わずかな友人との交遊をもちましたが、世俗との交際はいっさい断ちました。この失明という逆境に坐しても、素庵はなおも

学問を忘れませんでした。むしろ真に学問を楽しむことができたのではないでしょうか。

素庵の庵を訪れた野間三竹の談話（人見竹洞の日録に収録）によりますと「素庵は帳に坐し、侍史に口授して『本朝文粋』の訓点を改め、その外堂に傭書者をして惺窩編むところの『文章達徳録』を書せしめた。素庵は人となり淡泊で隠士の風があった」とあります。

遺著に『期遠集』があり、平日の著述の文章、詩賦、議論、和歌数十巻を蒐めたものであると『子元状』に記録されていますが、それが出版されたのか、手稿本が伝存しているのか、不明であります。これが発見されれば、素庵の芸術、嵯峨本などの出版事業、本阿弥光悦や俵屋宗達などとの交遊について明かになるでしょう。また、「中院」ゆかりの藤原定家が選した『百人一首』に倣って、『古詩百家選』を編み、その序を那波活所が書いています。これは中国の漢魏晋宋斉梁康宋元明の百人の詩人一首を選んだものであります。これも出版については不明であります。私たちの眼の前に出てきてほしいと思います。

（「素庵研究」の稿は終了。林進）

季刊 美のたより №110
平成７年３月１日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.